

はじめに

西 成彦

本研究会（通称、「第3期モダニズム研究会」）は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）によって2006年度から2009年度まで4ヵ年のあいだサポートを受けながら運営された。この4年間に、研究代表者及び研究分担者は数々の成果を世に問うたが、そのうち未刊行のもの、および研究会に協力して下さった若手研究者の研究成果を拾遺する形で、今回の特集を本誌に組ませていただいた。これらはすべて、上記、補助金（課題番号18202009）に基づく研究成果である。

なお、本特集に収められた成果以外の、すでに公刊されたメンバー全員の業績については、日本学術振興会のホームページ（<http://kaken.nii.ac.jp/ja/p/18202009>）を、また本研究会の「概要」やこの4年間を通じた活動の全容については、下記の私設ホームページを適宜参照されたい（<http://www.ritsumeai.ac.jp/~wkt26465/>）。

研究成果の概要

20世紀は西洋起源のモダニズムが世界へと広がりを見せた世紀であったが、これは西洋近代のグローバルな浸透の結果であるとともに、知識人を含むグローバルな人口の移動がもたらしたものである。とりわけ、こうした移動を誘引した近代的な社会変容に対する芸術家たちの批判的姿勢を抜きにしてモダニズムを捉えることはできない。それらを、ヨーロッパ・北米、ラテンアメリカ・中東、東アジアに地域を絞ることで解き明かした。モダニズムを西洋近代との交渉の手法とみなすという結論に達したが、東アジアにおけるモダニズムの展開において、日本のモダニズムが果たした逆説的な役割についても一定の解答を見出せた。

英文：

Modernism, construed as an invention of the Euro-American world, was disseminated over the whole earth together with the progress of economical and cultural globalization. This worldwide phenomenon was accompanied by the dissemination of traveling or displaced writers, endowed with a critical attitude toward the modernizing power in which they were involved. In our collaborative efforts we scrutinized various cases while focusing on the three target fields: 1) Europe and North America, 2) Latin America and the Middle East, and 3) East Asia. Our main conclusion is that everywhere modernism constitutes a method of negotiation with the prevailing Euro-American (colonialist) type of modernity. Additionally, the paradoxical role which Japanese modernism played in the East Asian modernist movement was also clarified to a large extent.

◆ 研究組織（所属・肩書は、2009年1月1日時点）

〔研究代表者〕

西成彦（NISHI MASAHIKO）：立命館大学・先端総合学術研究科・教授

〔研究分担者〕

木村一信（KIMURA KAZUAKI）：立命館大学・文学部・教授

中川成美（NAKAGAWA SHIGEMI）：立命館大学・文学部・教授

池内靖子（IKEUCHI YASUKO）：立命館大学・産業社会学部・教授

崎山政毅（SAKIYAMA MASAKI）：立命館大学・文学部・教授

大平具彦（OHIRA TOMOHIKO）：北海道大学・言語文化部・教授

エリス俊子（ELLIS TOSHIKO）：東京大学・総合文化研究科・教授

鈴木将久（SUZUKI MASAHISA）：明治大学・政治経済学部・准教授

鈴木雅雄（SUZUKI MASAO）：早稲田大学・文学学術院・教授

長畑明利（NAGAHATA AKITOSHI）：名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

安藤哲行（ANDO TETSUYUKI）：摂南大学・国際言語文化学部・教授

石川達夫（ISHIKAWA TATSUO）：神戸大学・国際文化学部・教授

野坂政司（NOSAKA MASASHI）：北海道大学・言語文化部・教授

細見和之（HOSOMI KAZUYUKI）：大阪府立大学・人間社会学部・教授

岡真理（OKA MARI）：京都大学・人間環境学研究科・教授

井上明彦（INOUE AKIHIKO）：京都市立芸術大学・美術学部・准教授

林少陽（LIN SHAOYANG）：東京大学・教養学部・准教授

李静和（LEE CHONG-WHA）：成蹊大学・法学部・教授

久野量一（KUNO RYOICHI）：法政大学・経済学部・准教授

黒田晴之（KURODA HARUYUKI）：松山大学・経済学部・教授

◆ 上記研究会メンバー以外で、今回、原稿を寄せて下さった投稿者の方々

島村輝（SHIMAMURA TERU）：フェリス女学院大学教授

鈴木暁世（SUZUKI AKIYO）：大阪大学大学院・院生（2008年9月当時）

森岡優紀（MORIOKA YUKI）：京都大学人文科学研究所・研究生（2007年9月当時）

友田義行（TOMODA YOSHIYUKI）：立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェロー
（2009年9月当時）